

# 村上春樹『騎士団長殺し』の装幀が生まれるまで。

February 28, 2017 | Culture, Design | casabrutus.com |  
photo\_Ayumi Yamamoto text\_Yuka Uchida

2月24日に発売された、村上春樹の長編小説『騎士団長殺し』。手がけたのは元新潮社装幀室長の高橋千裕だ。高橋を中心に、新潮社で30年来、村上春樹を担当する編集者・寺島哲也も交えて、今作の装幀の狙いを聞いた。



村上春樹『騎士団長殺し』の装幀。

「殺」の文字だけがズレた手書き風のタイトルロゴ。表紙から裏表紙へ、大胆に本を貫く二種類の剣。村上春樹の新刊『騎士団長殺し』の装幀は、発売初日までそのデザインが明らかにされなかったこともあり、ファンの注目を集めていた。装幀を手がけたのは元新潮社装幀室長で『ねじまき鳥クロニクル』や『1Q84』など村上の長編作品も担当してきた高橋千裕。

「装幀は、装幀家がひとりでするものではない」と話す高橋。担当編集

のひとりである寺島哲也とともに、著者も交えた制作現場を振り返った。

**Q 今作の装幀はいつ頃から準備を始めたのでしょうか？**

**高橋** 原稿を手にしたのは2016年の10月中旬です。発売日の4か月程前ですね。私は2014年に新潮社を定年退職しているのですが、今回もありがたいことに声をかけていただいて、春樹さんの7年ぶりの本格長編を担当することになりました。

**Q 原稿を読んだ後、どのように装幀にとりかかるのでしょうか？**

**高橋** 春樹さんの場合は少し特殊です。私は普段は著者と会うことはせずに装幀を考えるのですが、春樹さんとは直に会って、綿密に打ち合わせをします。なぜ普段は著者に会わないのかというと、引きずられ過ぎてしまうからです。特に新潮社時代はインハウスデザイナーですから、著者の意向を否定して心象を害すようなことはしづらい。なので、まずこちらで装幀を進め、それを著者に判断してもらおう、というスタンスで仕事をしていました。でも、春樹さんの場合は本人からファーストサジェッションを受け取ります。というのも、これは私の推測ですが、春樹さんは小説を書きながらぼんやりと装幀を思い描いているのではないかと思うんです。言葉の人なので、映像として具体案が浮かんでいるかはわかりませんが、なんとなく固まっているものがある。これは今まで担当させてもらって感じてきたことです。なので、春樹さんがどう思っているかを聞くことから始めます。



『ねじまき鳥クロニクル』や『1Q84』など、新潮社時代に高橋が装幀を手がけた村上作品と最新作の『騎士団長殺し』。普段は著者とは会わずに仕事を進める高橋だが、村上とは顔を突き合わせ、綿密に打ち合わせを重ねるといふ。

**Q** では、今作では最初にどのような話をしたのですか？

**高橋** 春樹さんは、まず「剣」だろうと。なので、装幀のテーマが「剣」だというのは最初の話で決まりました。そして、1巻と2巻の2冊をデザインするので、ひとつは飛鳥時代の和剣。もうひとつは洋剣にしようとなりました。『騎士団長殺し』というタイトルからも分かるように今作はオペラの『ドン・ジョバンニ』が関係しているので。

**Q** 『ドン・ジョバンニ』はモーツァルトのオペラですね。次々と女性を誑かす主人公のドン・ジョバンニが、ある夜、ドンナ・アンナという女性を騙そうとして屋敷に忍び込むが、父親に見つかってしまう。そして、騎士団長でもあったその父親をとっさに剣で殺してしまう……という。

**高橋** そうです。それで剣をどうデザインしようかと悩んで、最初は鞘に



入った剣と抜き身の剣をクロスさせた案などをつくりました。小説からミステリアスな印象を受けていたので、そんな雰囲気もあったと思います。それを見た春樹さんは「もっとシンプルにしてほしい」とおっしゃいました。



緑の帯の第1巻に洋剣、えんじの帯の第2巻に和剣を描いた。装幀の仕事を数多く手がける、イラストレーター・チカツタケオの仕事。

**NEXT PAGE**

[村上春樹自らスケッチ](#)



**Q** 「シンプルに」という以外にリクエストはありましたか？

**高橋** 2度目の打ち合わせで「抜き身の剣」がいいという話もありました。

**寺島** その時は春樹さん自ら「こんな感じかな」とスケッチも描いてくれました。あんなことは珍しい。担当して初めてのこともかもしれません。

**高橋** 最初のラフにはイメージに近い写真を使っていましたが、実際にはこの世にない剣にしたかったのでリアルなタッチのイラストにすることになりました。そのために剣の資料もいろいろと調べましたよ。洋剣は時代ごとに様相が変わります。参考にしたのは十字軍が使ったような太めの剣から、フェンシングで使われるような細い剣に変わっていく端境期の剣です。柄を握る鰐（つば）は十字架のようにまっすぐなデザインが多いのですが、架空の剣なので湾曲しています。

**寺島** ラフを見て「ここは、曲げられないのかな」と春樹さんが言った気がします（笑）。

**高橋** そうでしたね。和剣は飛鳥時代のものとししました。でもこの時代は現存する剣が少なく、確か2掉くらいしか残っていないんです。最初に頭に浮かんだのは、正倉院の宝物殿にある剣。それをそのままモデルにしたわけではないのですが、いろいろと資料を当たって今のデザインになりました。

した。

**Q** 描いたのはイラストレーターのチカツタケオさんですね。

**高橋** チカツさんしかいないと思いました。春樹さんにもチカツさん以外、提案していません。チカツさんにはレイアウトが完全に決まってから依頼をし、こちらのイメージを詳細に伝えてイラストを仕上げていただきました。

**Q** 洋剣にはよく見ると羊が描かれていますね。

**高橋** これはチカツさんのアイディアです。チカツさんには原稿を渡さずにイラストを描いてもらったのですが、村上春樹さんといえば羊だろう、と紋章にしてくれました。

**寺島** この案は春樹さんも「面白いね」と言ってくれましたね。

**高橋** 原画は幅1m近くある大きなものです。和剣には飾り紐があったほうがそれらしいんじゃないか、とか。宝石を埋めた柄頭はもうひと回り大きくしよう、とか。春樹さんだけではなく、みんなで意見を交わしながら形にしていきました。

2月24日に発売された、村上春樹の長編小説『騎士団長殺し』。手がけたのは元新潮社装幀室長の高橋千裕だ。高橋を中心に、新潮社で30年来、村上春樹を担当する編集者・寺島哲也も交えて、今作の装幀の狙いを聞いた。





高橋さんによるタイトルロゴ。「殺し」という言葉が強烈な印象を残すが、手書き風の文字によってどこかユーモラスな雰囲気を感じる。

## Q タイトルロゴはどのように生まれたのでしょうか？

**高橋** 手書き風にしてほしいというのも春樹さんの最初の要望のひとつでした。『騎士団長殺し』という字面は漢字が多くてカクカクしている。ここにニュアンスを加えたい、でも単に手書きにしてみると印象が柔らかすぎる。絶妙なバランスはどこか何度も試しました。



インパクトのあるタイトルだからこそ、そのニュアンスを正確にビジュアルに示さなくてはならない。明朝体をベースに細かく手が加えられた。

**高橋** 仕上がったロゴは、明朝体をベースに作字したものです。例えば「騎」という文字の「大」が普通に比べて小さい。「団」や「長」という字は縦線が長い。そうやって、バランスが崩れるか崩れないかのギリギリを狙って、細部を調整していきました。パソコン上で大まかに形が出来上がったら、その文字をなぞり直してさらに微調整を加えています。明朝体はいずれも、大なり小なり縦線がカーブしているのですが、その曲線がよそよそしい感じを生む。線をまっすぐに引き直すことで、より手書きらしさを出しています。

**寺島** 「殺」の文字だけ斜めにずらしたのも春樹さんの案でした。何度目かの打ち合わせが終わって、みんなで世間話をしていたときに、ふと思いついたみたいに。

**高橋** 「殺」の部分だけ紙を切り出して、手で動かしながら「右にずらしてはどうか？」「もっと角度をつけたほうがいいんじゃないか？」と話し合ったんですよね。



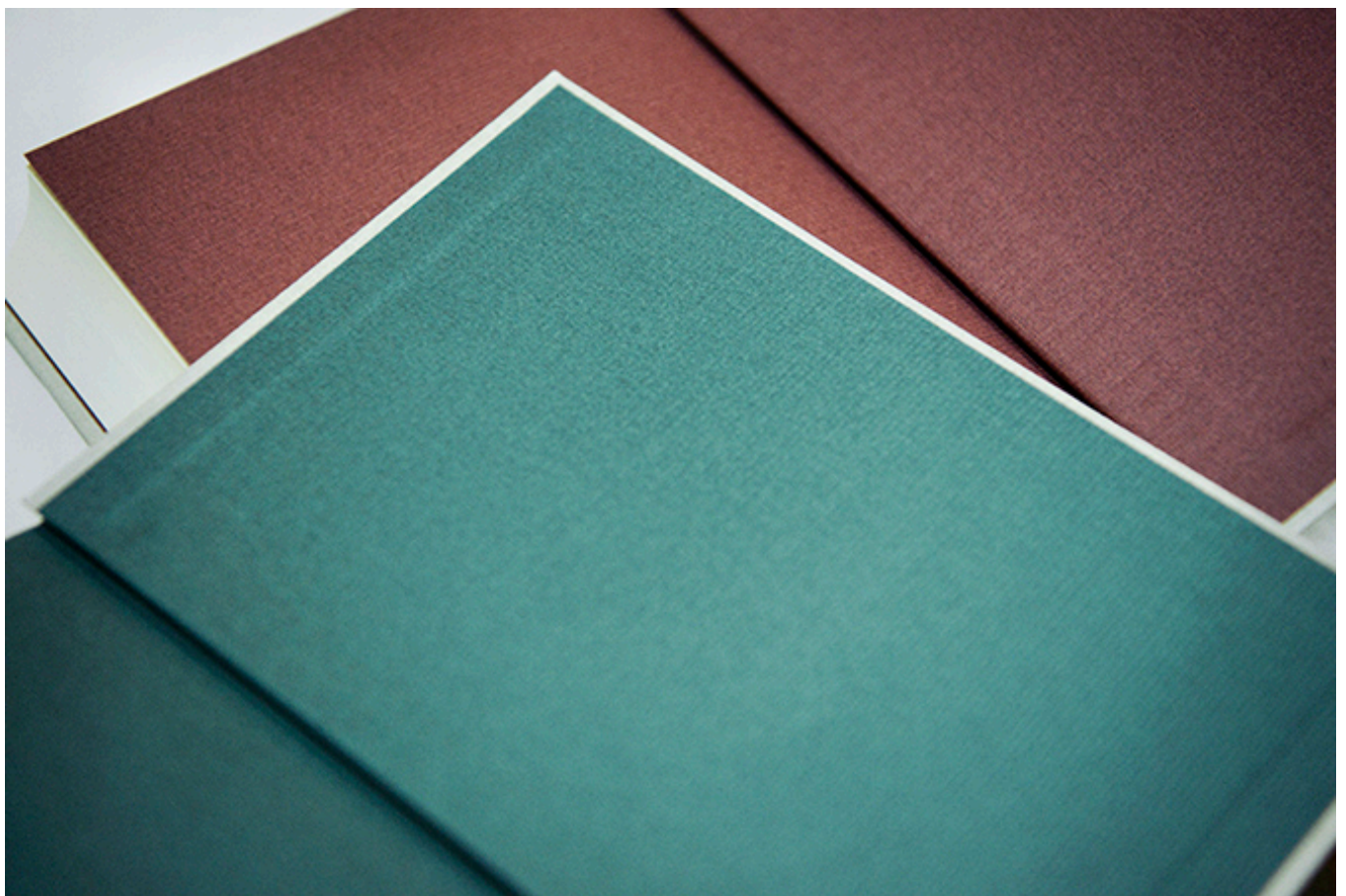
寺島 いろいろ角度を試して、最終的には春樹さんが指で絶妙に直して、「これくらいじゃない？」と。それを動かさないように、慎重にセロハンテープで固定して（笑）。そうやって「殺」の角度が決まりました。

高橋 春樹さんは本づくりを楽しんでいるんですよね。だから一緒にやっていて楽しい。とても厳しいけれど。

## NEXT PAGE

### おとなしいイメージの装幀

2月24日に発売された、村上春樹の長編小説『騎士団長殺し』。手がけたのは元新潮社装幀室長の高橋千裕だ。高橋を中心に、新潮社で30年来、村上春樹を担当する編集者・寺島哲也も交えて、今作の装幀の狙いを聞いた。



第1巻を開くと、ざらりとした手触りの深緑の見返しが表れる。第2巻は茶に近い、えんじ色だ。

**Q** 第1巻は見返しが緑、第2巻はえんじですね。色の意図を教えてください

ださい。

**高橋** 第1巻は物語が始まる新緑の季節をイメージしたもの。物語は夏から秋、冬へと移り変わっていくので、第2巻では土をイメージしています。この色は私からの提案なのですが、ひとつ気になったのが『ノルウェイの森』の装幀が緑と赤であることでした。同じにしたくないのは春樹さんも同じだったと思います。でも緑と対比させるならオレンジではだめで、それでは全然違うものになってしまう。それで同じ緑と赤でも印象が変わるよう、日本画のような落ち着いた色合いにしました。

**Q** 装幀全体のトーンも落ち着いているように思います。

**高橋** そうですね、おとなしい装幀です。『1Q84』と比べると印象が全く違う。『1Q84』のデザインはどちらかというとポップで、その時代を映していた。今は世の中が落ち着いてきているように思うので、しっとりとした、古風な雰囲気になりました。主人公が画家なので、カバーをキャンバス地のような微妙なエンボスのある「サガンGA」という紙に、帯は木炭紙のような質感の「ポルカレイド」にしています。読んでいる人が絵画の世界に触れているような感覚になればと考えました。

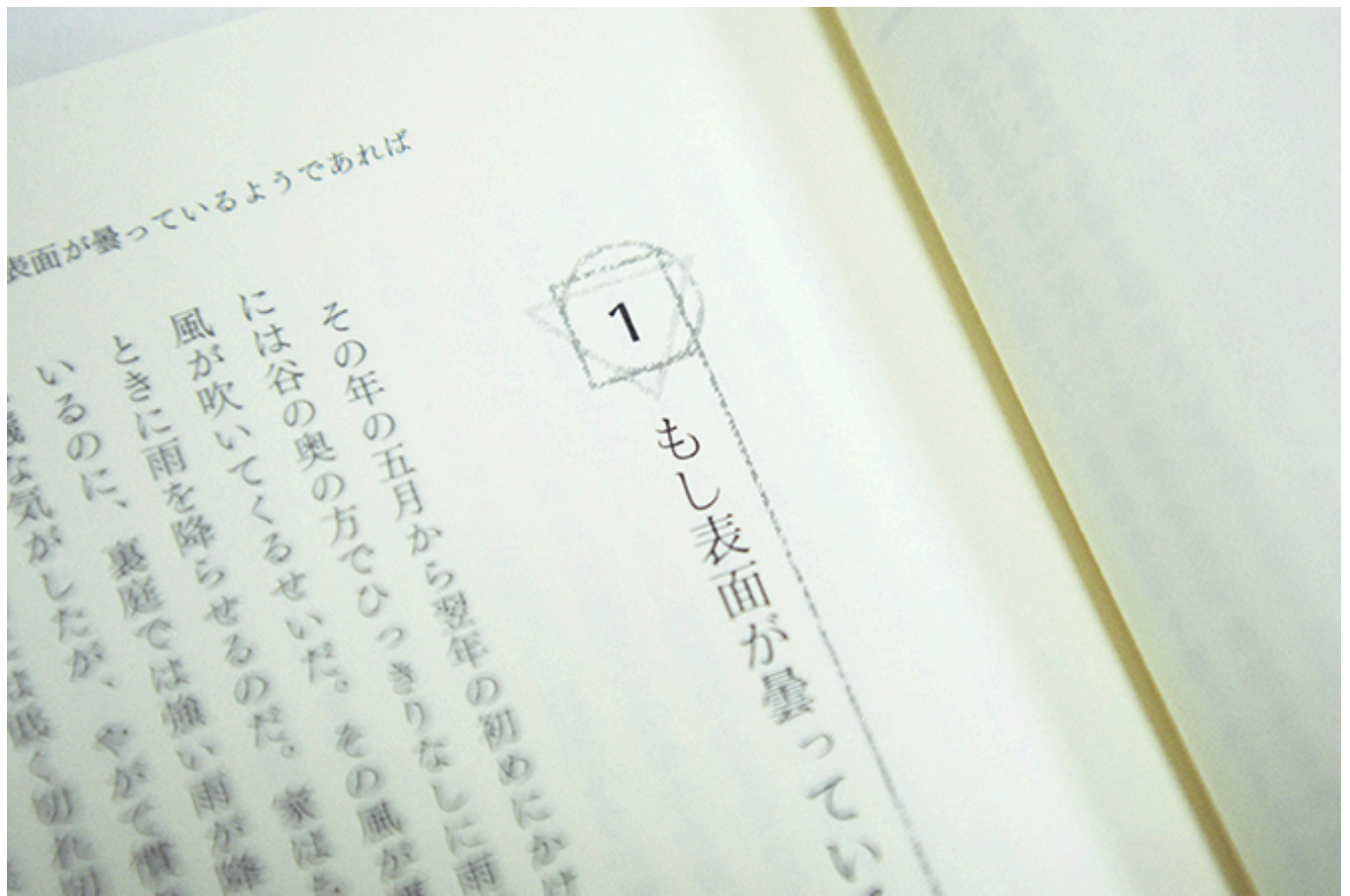




スピン（栞紐）と花布。初版100万部を超える今作では、本の資材を調達するにも綿密な計画が必要だ。本文用紙は装幀が決まりきる前の昨年末に確定しなくてはならなかった。花布の多くは新潟の小さな工場で作られているため、数を確保するのが大変だったという。

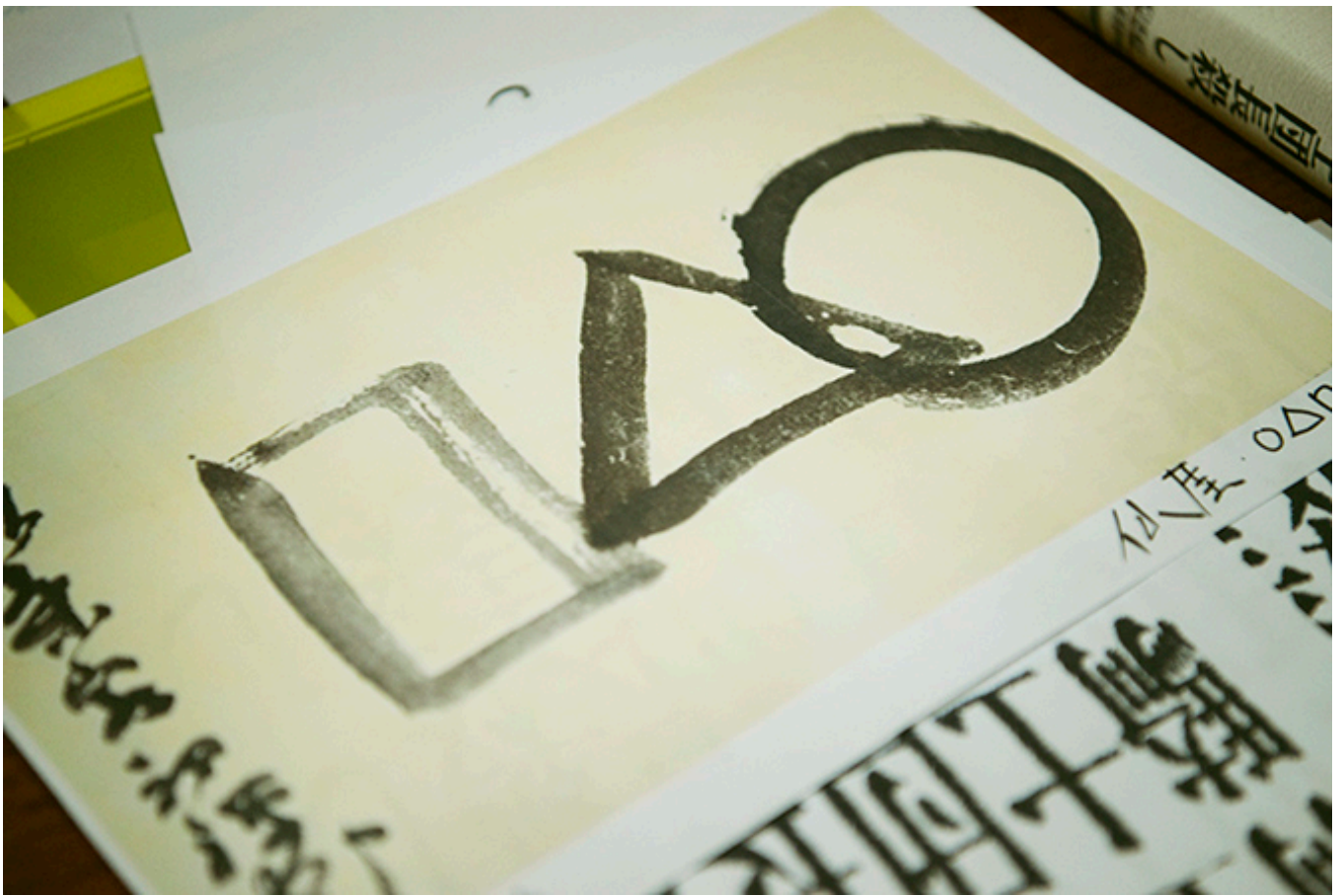
## Q ほかに高橋さんのアイデアを盛り込んだ箇所がありますか？

**高橋** 章タイトルにつけた飾りは私がつくったものです。物語を読んで、仙厓義梵という江戸時代のお坊さんの絵を思い出したんです。物の根源は、丸と三角と四角でできているという意味が込められた絵です。その絵と、登場人物の雨田という日本画家が生きた時代に流行ったアール・デコのイメージを重ね合わせました。



『騎士団長殺し』の章タイトルまわり。暗示的な装飾が小説の世界観を深める。





江戸時代に生きた禅僧であり、絵師の仙厓義梵の作品《〇△□》。

**寺島** このアイデアは春樹さんもすぐに気に入ってくれました。章タイトルのまわりは、『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』や『ねじまき鳥クロニクル』の世界観からもデザインのイメージが踏襲されています。『ねじまき鳥クロニクル』と『1Q84』の章タイトルは高橋さんがデザインしたもので、「天吾」「青豆」という文字が手書きでできています。





新潮社装幀室の本棚に並べた、高橋さんが手がけた村上春樹の著書。このほかに文庫や翻訳本なども。30年近く仕事を共にしている。

Q 高橋さんが最初に手がけた村上さんの著書は何ですか？

**高橋** 1987年に発売されたC・D・B・ブライアンの『偉大なるデスリフ』です。村上さんが翻訳をしています。装画はラウル・デュフィです。原稿を読んで、パッとこの絵が浮かび、迷わず使うことにしました。

寺島 私にとってもこれが初めて担当する村上さんの本でした。これまでの編集者人生で、もっとも気に入っている装幀のひとつです。





挿画に選んだのは、デュフィが画家になる以前に手がけた壁紙のための絵。表紙に「きらびき」という紙を使用し、光の反射で輝く。

**Q** これまでの本づくりも、村上さんの意図を汲み取って、それを具現化していくという流れだったのでしょうか？

**高橋** そうですね。春樹さんは絵も本もたくさん見ているし、非常に感覚が鋭い方。それを信じて、春樹さんから抽出したイメージを形にしていくという意識でやっています。それでも行き詰まってしまうことはある。今までで一番大変だったのは『ねじまき鳥クロニクル』。あの本は半年ほどかけて制作しました。

**寺島** あのとときは村上さんからの“宿題”があったんです。

**高橋** 難しい“宿題”でしたね。まず、表紙にはこの世にいない鳥の絵を飾りたい。そして、1巻目は緑を基調としてほしい。

**寺島** 帯はつけないことも大事な方針でした。ですから発売当時は帯を付けていません。そしてもう一つ、いままで見たこともない装幀にしてほし

い、というもの。それで半透明の紙をカバーにするという案が生まれました。

**高橋** 鳥探しも難航しましたね。いくつか提案したのですがしっくりこなくて、煮詰まった私が一旦手を休めようとバリに旅行に行ったんです。そこで訪れた古い美術館で、ある絵の中に鳥を見つけて。これだ！と。

**寺島** 『1Q84』の時は、反対に“何もいない”というのがテーマだった。極端に言えば「真っ白な装幀でいい」と。

**高橋** イメージが付着してしまうようなビジュアルはほしくない、ということでしたね。でも真っ白な本にするわけにはいかないので、「Q」という字をフックにアイデアを広げていきました。とにかくたくさんの「Q」という字をつくりました。採用した「Q」には、石に彫った文字を拡大したようなニュアンスがあります。刻みつけた匂いというのかな。その雰囲気と、メインタイトルのシャープさとのコントラストを狙いました。



“石に彫った文字を拡大したような”と高橋さんが言う、『1Q84』の「Q」のロゴ。



**寺島** 村上さんがほかの出版社とどのように本づくりをしているのかはわかりません。ただ僕たちは30年近くチームを組んできた。だから春樹さんには、思っているイメージをどんどん言ってもらえるし、たくさんわがままを言って欲しいと思っています。

**高橋** いつも率直に意見を言ってくれる。

**寺島** 著者の持っているイメージを本というオブジェで具現化することが大事なんです。

**Q** 装幀は個人のアイデアだけで完成するものではないんですね。

**高橋** 私はそう思います。新潮社装幀室が手がけた本には、個人名ではなく部署名でクレジットが掲載されています。私が室長になった90年代頃からそうしているんです。本は装幀家という個人がつくっているわけではない。著者や編集者、営業も一緒になってつくっている。だから、出版社のインハウスデザイナーの姿勢として、「新潮社装幀室」と記すことにしました。今作は退職後の仕事なので私の名前が載っていますが、村上春樹の本をチームで作っているという感覚に変わりはありません。



### 高橋千裕

たかはしちひろ 1954年東京都生まれ。都立工芸高等学校、桑沢デザイン研究所でデザインの基礎を学ぶ。1972年から新潮社に勤め、装幀者・広告制作者として単行本・文庫本2000冊以上の装幀、宣伝物を手がける。2014年に退職後も装幀家として活動。装幀を手がけた村上春樹の著書に『ねじまき鳥クロニクル』

（単行本・文庫）、『辺境・近境』（単行本・文庫）、『神の子どもたちはみな踊る』（単行本）『東京奇譚集』（単行本・文庫）、『象の消滅』（単行本）、『めくらやなぎと眠る女』（単行本）、『1Q84』（単行本・文庫）、『小澤征爾さんと音楽ついて話をする』（単行本・文庫）などがある。



## 村上春樹『騎士団長殺し』

7年振りとなる書下ろし本格長編小説。第1部「顕れるアイデア編」、第2部「遷ろうメタファー編」を同時発売。画家である主人公・私は、その年の五月から翌年の初めにかけて、狭い谷間の入り口近くの、山の上に住んでいた。それは孤独で静謐な日々であるはずだった。騎士団長が顕れるまでは――。各巻1,800円（新潮社）